

令和3年度第2回移動教育委員会 懇談会発言要旨
(静岡聴覚特別支援学校、静岡視覚特別支援学校)

開催日時：令和3年7月14日(水) 15:15～16:15

場所：静岡視覚特別支援学校

参加者：静岡聴覚特別支援学校職員、静岡視覚特別支援学校職員、
静岡県教育委員 など

1 学校概要説明及び取組

<静岡聴覚特別支援学校>

[学校経営方針]

(1) 目指す学校像「学びをつなげる学校」

(2) 教育目標

自己の障害への理解を促し、一人一人の可能性を最大限に伸ばし、心身の調和的発達を図るとともに豊かな言語力を育て、社会の一員として主体的に生きる人を育てる。

<教育の柱>

○豊かな言語力 ○確かな学力 ○健やかな体 ○思いやりの心

(3) 目標具現化の柱

【安全安心】子どもが健康で安全安心な生活を送ることができる学校

【つなげる学び】縦にも横にもつながる効果的な学びを進める学校

【連携協働】連携協働した教育活動の充実

[その他情報]

・幼児児童生徒数 36 人

(乳幼児教室 6 人 (1 歳児 2 人、2 歳児 4 人)

(幼稚部 10 人 (3 歳児 6 人、4 歳児 4 人) 小学部 16 人、中学部 4 人)

・50 年以上に渡って早期療育支援 (医療機関との連携、保護者や本人への支援、環境支援など) を実施

・令和3年度文科省モデル事業 静岡県「令和3年度保健・医療・福祉と連携した聴覚障害のある乳幼児に対する教育相談充実事業」対象校

(令和2年度から本校に乳幼児教育相談マネージャーを配置)

<静岡視覚特別支援学校>

[学校経営方針]

- (1) 目指す学校像 校訓「明るく強く」
- (2) 教育目標 「自立と社会参加を目指し、可能性を広げる」
 - ・様々なことに興味を持ち、夢や目標に向かって主体的に知識・技能及び習慣を身につける。
 - ・相手の立場を尊重し、周りの人とコミュニケーションをとって行動できる態度を身につける。
 - ・生活のリズムを身に付け、運動に親しみ、健康でたくましい体をつくる。
- (3) 具現化の柱 「信頼され、選択される学校」
 - 【育む】一人一人に応じた、生活につながる基礎的・基本的な知識・技能及び習慣を育む。
 - 【守る】安全で生き生きと生活できる豊かな学習環境を整える。
 - 【つなぐ】専門性の維持・継承と授業力を向上させると共に、そのための職場環境を整える。
 - 【つながる】視覚障害教育の情報発信の充実を図ると共に、地域との連携、協働体制を整備する。

[その他情報]

- ・学部別幼児児童生徒数 16 人
(幼稚部 1 人、小学部 11 人、中学部 1 人、高等部 3 人)
- ・平成 10 年から超早期教育（視覚に障害を持つ 0、1、2 歳児）を実施し、乳幼児に対して感覚・認知・運動などの発達を促し、保護者に対して安心して視覚障害のある乳幼児を育てることができるよう支援
- ・高等部保健医療科は視覚に障害のある人が学ぶ、あん摩マッサージ指圧師の養成課程であり、浜松視覚特別支援学校の分室として設置。あん摩マッサージ指圧師の国家資格取得を支援している。
- ・長距離通学や障害等の状況により、通学が困難な児童生徒のために寄宿舎設置（静岡聴覚特別支援学校と合築）

2 授業見学等

聴覚・視覚特別支援学校の教育の現状及び相談体制充実と教育環境整備

- (聴覚) 聴覚障害のある幼児児童生徒への教育の現状（人工内耳及び手話など）と相談体制充実のための保健・医療・福祉部門との役割分担
- (視覚) 視覚障害のある幼児児童生徒の教育の現状と専門性の確保
- (共通) それぞれの障害に係る早期対応の重要性

3 懇談会

教育委員

生徒が減っている主な理由は何か。

静岡視覚

少子化の問題や医療の進歩（未熟児網膜症などが激減）、比較的通常の小中学校などで支援を受けながら通っているなど大きく3点挙げられる。

静岡聴覚

インクルーシブ教育が進んでいること。また、人工内耳装用児が増えており、小学校、中学校で学ぶ子が増えて、特別支援学校の通級による指導が充実したことなども挙げられる。

教育委員

情報機器（特に特別支援学校として）で活用できるものは何か。

静岡視覚

タブレットに教科書データをダウンロードし、拡大機能や読み上げ機能を活用している。

静岡聴覚

Wi-fi環境が整い、Zoomでの授業を実施するなどWebを活用した指導が充実してきている。引き続き、UDトーク（コミュニケーション支援・会話の見える化アプリ）など特別支援が必要な幼児児童生徒向けに利用できるアプリも使っていきたい。

教育委員

情報機器については、使うことが目的ではなく、使って成果を検討し、学校側から新しいアイデアや提案をしていくことが必要と考える。

教育委員

早いうちから相談体制が整っていて、適切な教育を受けられていることがわかった。それぞれの学校は、単一の障害の児童生徒に対応していると思ったが、重複した障害のある児童生徒が多いとの実態が分かり、そういった現場を私たち自身もっと知っていくべきだと感じた学校視察となった。重複した障害や一人一人障害が違う児童生徒に対して、課題に感じていることや要望などあれば教えていただきたい。

静岡視覚

共生社会の実現のために、健常者と障害者の交流など、子供たちと触れ合う機会をつくり、いかに社会性を育むかが大事である。本校は、西豊田小学校と長く交流しており、これからこういった形で広げていくかが課題である。

交流籍※の活用については、まだ始まったばかりであり、結果や成果は今後見ていきたい。これを積み重ねていく中で相互理解を深め、障害のある子が大勢の中で萎縮することなく、子供たちが仲間と学び合う機会の確保を目指している。

静岡県全体の教職員の人事異動については、障害種別の中での異動もある。障害種別間での異動でも、それぞれの経験を生かし、お互いに補いながら対応している。

学校間交流については、視覚特別支援学校同士の交流に取り組んでいるところもあり、オンラインでの交流を進めていきたい。

※交流籍とは、特別支援学校の小・中学部に在籍する児童・生徒が居住する地域の小中学校に持つ副次的な籍（交流籍）のこと。交流籍を活用し、直接的な交流や間接的な交流を通じて、居住する地域とのつながりの維持・継続を図ることを目指している。

静岡聴覚

交流籍とは別に、本校は、大里西小学校と授業交流をしている。また、聴覚特別支援学校同士で卓球大会などの交流や県立熱海高校とコラボした修学旅行（1泊2日）の計画をして、子供たちの社会性を育てている。

地域との交流を進めていき、子供同士、教員同士（校外教員含む）がつながることが大事である。

重複した障害のある幼児児童生徒に対して、重度の障害の場合、マンツーマンで対応したり、専門性を生かせる人事配置を心掛けている。人材の確保と継続した配置は課題である。

県教育委員会事務局

コロナ対策等や人材に関することで苦勞している点を教えていただきたい。

静岡視覚

超早期教育は、専門性が求められる職種である。今回、適任者を見つけることができたが、次の方を見つけるのが難しい。人材の確保が課題である。

また、コロナ対策スタッフを配置していただき、教員の負担軽減になった。（任用期間9月30日まで）

昨年度、各行事等がコロナ対策のため中止を余儀なくされた。今年度は教員も対応力がつき、十分な対策を取りながら各行事が実施できている。

静岡聴覚

コロナ対策については、幼児児童生徒の消毒への意識や黙食が定着している。また、コロナ対策スタッフが丁寧に対応してくれたおかげで、教員が授業づくりに専念でき非常に助かっている。コロナ対策スタッフがいつまで在籍してくれるかが心配である。

乳幼児教育相談マネージャーはノウハウのある元校長先生が着任している。外部との調整だけでなく、乳幼児教室や教員に対する指導もしてくれて助かっている。

県教育委員会事務局

相談体制は県全体か東中西のエリアごとが良いか、どちらが望ましいか教えていただきたい。

静岡聴覚

静岡県はとても広く、また、教育相談は学校との連携が必要なので、エリアごとの方がよい。

県教育委員会事務局

学校視察を通して、教員の皆様が寄り添いながら、児童生徒がのびのびと学校生活を送っており素晴らしいと感じた。100人いれば100人の見え方、聞こえ方がある。

教員に求められる障害への理解と教科学習指導、保護者への対応など、多岐にわたって対応が必要であり、専門性の向上が課題である。OJTをされていると思うが、どのような工夫をしているか。

静岡視覚

経験の浅い職員や、中には視覚障害児を初めて担当する教員もいる。こうした教員のため、年5、6回の研修を実施している。内容としては、チーム分けをして点字、見え方、アイマスクをして食事など特別支援教育全般にかかる校内研究・研修をしている。

また、外部人材の活用をして専門性を高めている。例えば、歩行訓練士による年8回指導、視能訓練士による見え方の指導をいただいている。

静岡聴覚

自身も、4月から挨拶の時は「キューサイン」を使用したり、手話講習会をレベルに応じて受けたりしながら専門性を向上させている。関東にある聴覚特別支援学校との研修会にもZoomで参加した。教員向けに校内の自立活動研修会を実施し、総合教育センターの教科の希望研修も積極的に受けるよう促している。教員は障害への理解、教科指導、保護者対応など、多岐にわたる業務があり、外部人材を活用した育成支援がこれからも継続的に必要である。